



**Data**

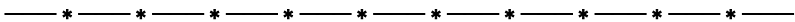
監督・脚本：フォルカー・シュレンドルフ

出演：レオ＝ポール・サルマン／マルタン・ロウズィヨン／ヴィクトワール・デュボワ／マルク・バルベ／ジャン＝マルク・ルーロ／フィネガン・オールドフィールド／セバスチャン・アカール／ジャン＝ピエール・ダルツサン／リュック・フロリアン／アリエル・ドンパール

## 👁️👁️ みどころ

「ヴェル・ディブ事件」とは？「ナント事件」とは？「ドイツもフランスも我が祖国、両国の和解なくしてヨーロッパはない」を信条とする、ドイツの巨匠フォルカー・シュレンドルフが独仏合作でつくった本作から、ナチス・ドイツ占領下のフランスで起きた悲しい事件をしっかりと学びたい。

1人のドイツ人将校暗殺の報復には、フランス人150人の死を！いかにも、ヒトラーらしいそんな要求は、いかなる展開で政治犯を中心とした48人の銃殺に結び付いたの？「人質リスト」の作成は非人間的な作業だが、そこに見られる独仏の人間模様に注目しながら、悲しいクライマックスを涙の中で味わい、かつ「書くことの大切さ」を再認識したい。



## ■□■ヴェル・ディブ事件に続いてナント事件のお勉強を！■□■

『黄色い星の子供たち』（10年）（『シネマルーム27』118頁参照）と『サラの鍵』（10年）（『シネマルーム28』52頁参照）では、「ヴェル・ディブ事件」を学ぶことができた。これは、1942年16～17日に起きた、ユダヤ人の一斉検挙事件のこと。ヴェル・ディブは冬季競輪場として建設された巨大な建物だが、そこに収容されたのは、当時パリに住むユダヤ人2万4000人のうち8000人というからすごい。「黄色い星」とはナニ？そしてヴェル・ディブに収容されたユダヤ人たちの悲しい運命とは？それは、この2本の映画を観て勉強してもらいたいが、本作では、1941年10月に起きた、「ナント事件」を学ぶことができる。

それに対して、「ナント事件」とは、ナチス・ドイツ占領下のフランスのナントでナチス・

ドイツ軍の将校ホッツが、白昼フランスの青年共産党員である22歳の若者ジルベール・ブルストラン（フィネガン・オールドフィールド）とマルセルの2人によって、背中から撃たれて殺害されたことの報復として、シャトブリアン収容所の人質27人、ナントの人質16人、パリの人質5人の計48人が銃殺された事件だ。少し前に起きたナチス兵士殺害事件での報復はフランス人の人質3人だったが、将校が殺害されたと聞いて激怒した総統ヒトラーは、フランス人150人の処刑を要求したらしい。結果的に48人で済んだのだから、まだマシだったかもしれないが、このように悲惨な、「暗殺と報復の連鎖」が、ナチス・ドイツ占領下のフランスでなぜ起きたの？

## ■本作の原型は、17歳の少年ギィ・モケの史実■



● ARTE France -2011-LES CANARDS SAUVAGES -7ème Apache Films-PROVOBIS FILM

去る9月9日に1万2000ページにも上る、昭和天皇の「昭和天皇実録」が公表されたことを受けて、新聞各紙は大小さまざまな特集を組み、その紹介をしている。当初は「無色透明」の紹介が多かったが、近時は少しずつ、「平和を愛し、戦争を回避しようとした昭和天皇」という意識的な編纂になっているのではないかと、という批判的な評論や「『昭和天皇実録』公表で浮上する政治利用への疑問」（『週刊ダイヤモンド』2014年10月4日号）等も出てきている。さて、今後の展開は？

『ブリキの太鼓』（79年）でドイツ人監督として初のカンヌ国際映画祭パルムドールを受賞したフォルカー・シュレンドルフ監督も、今年は既に75歳。『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマルーム32』215頁参照）の監督マルガレーテ・フォン・トロッタ

が彼の妻であることはよく知られているが、夫婦ともにドイツ史を見つめ続け、ドイツ映画界を今も牽引している巨匠で、彼の信条は「ドイツもフランスも我が祖国、両国の和解なくしてヨーロッパはない」ということらしい。そんな彼が本作の原型にしたのは、フランス人にとっての“ゾフィー・ショル”（『白バラの祈り』）と言われる、17歳の少年ギィ・モケの、そのあまりに早すぎる死で知られる史実だ。

## ■ ■ 「伝説の物語」から「史実の物語」へ ■ ■

本作のプレスシートに書かれている Introduction によれば、「若き日にフランスに留学した経験をもつシュレンドルフ監督はドイツの著名な作家・思想家であるエルンスト・ユンガーの回想録とノーベル文学賞作家であ



◦ ARTE France -2011-LES CANARDS SAUVAGES -7ème Apache Films-PROVOBIS FILM

るハインリヒ・ベルの小説に着想を得て、この史実を脚本に書き上げた」そうだ。そしてそれは、「ギィ・モケのみを象徴とするのでなく、彼とともに命を絶たれた収容所のフランス人たち、ヒトラーの命令を回避しようとするドイツ軍人たち、銃殺を命じられたドイツ兵ら複数に焦点をあてている」。つまり、同監督は、「伝説化されたギィ・モケの物語から、真実の物語へ、史実の読み直しを試みたのだ」。

このエルンスト・ユンガーは本作にも、作家ながらナチス・ドイツ軍の軍司令部付き大尉として従軍した人物として登場する。そして、彼はフランス占領行政の中枢たる軍政司令部のトップ、駐仏軍政司令官のオットー・フォン・シュテュルプナーゲル将軍（アンドレ・ユング）から、「報復のリスト」作成の過程について、「この一件を記録すること」の依頼を受けることになる。しかして、このエルンスト・ユンガーの書いた「パリ日記」こそが、その一件記録なのだ。

他方、今年もノーベル文学賞の有力候補とされていた村上春樹が受賞を逃し、フランスの作家パトリック・モディアノがその榮譽に輝いたが、1971年に発表した『夫人のいる群像』によって、1972年にノーベル文学賞を受賞したのが、ハインリヒ・ベル。そんな2人の著名作家の尽力を得て、フランス版「ゾフィー・ショル」と言われる17歳の

少年の「伝説の物語」が、本作が描くような「真実の物語」になったわけだ。

今や書店の売り場を占拠するほどの大人気となった村上春樹の小説を読むのも結構だが、本作の鑑賞を契機として、そんなドイツの軍人兼作家エルンスト・ユンガーやノーベル文学賞作家ハインリヒ・ベルについても少し勉強してみても・・・。

## ■□■ 占領下での人間模様は？フランス側その1 ■□■

ナチス占領下のフランスでは、1940年6月にペタン元帥が首相となり、7月1日には首都をヴィシーに移して、親独派のヴィシー政権が誕生した。これに対して、あくまでナチス・ドイツに抵抗したのが、シャルル・ド・ゴール將軍率いる「自由フランス」だ。『黄色い星の子供たち』では、ヴェル・ディブ事件でヒトラーが押し進めるユダヤ人狩りに協力するペタン政権の姿が描かれたが、さてシャトーブリアン収容所にみる、独仏の人間模様は？

第1に、フランス側の人物で最も切ないのは、シャトーブリアン郡副知事としてナント事件の処理にあたった、35歳のフランス人ベルナール・ルコルヌ（セバスチャン・アカール）。シャトーブリアン郡庁舎で、この地域のドイツ司令官クリストウカト（クリストファー・ブッフホルツ）から「報復のリスト」として27名の人質のリスト作りを命じられたルコルヌは、一度は拒否したものの、“良いフランス人”を犠牲にする気かと迫られると、やむなく政治犯が多いショワゼル収容所から人質を選択することを受け入れることに。

## ■□■ 占領下での人間模様は？フランス側その2 ■□■

次に切ないのが、ショワゼル収容所の所長ルシアン・トゥーヤ（ジャン＝マルク・ルーロ）。トゥーヤも一度は命令を拒否したが、結局は受け入れざるをえないことに。

他方、同じフランス人でありながら、先頭にたってリスト作りを始めたのが、ジョルジュ・シャサーニュ（リュック・フロリアン）。彼は1939年の独ソ不可侵条約の際の共産党の対応に幻滅したとしてフランス共産党を離れた人物だが、いくらそうだとってもそんな作業を積極的に進めている彼の心境は？

さらに、本作には27名の人質の手紙を預かった実在のモヨン神父（ジャン＝ピエール・ダルッサン）が登場する。政治犯たちは、さかんに外の情報を聞きたがったが、残念ながら彼にはそんな情報はゼロ。神父の彼にできることは、もし祈りを希望するならそれをしてやること、そして最後に書いた手紙を預かり遺族に届けると約束してやることだけだ。そんな彼の切ない気持ちは、クライマックスでいかに爆発するの・・・？

本作のクライマックスに向けて、モヨン神父は、「報復のリスト」づくりに関わったルコルヌ副知事に対して、「君も加担していることになぜ気づかない？」と叱責し、銃殺は暗殺を、暗殺はさらなる銃殺を生み、報復の連鎖にしかならないと語る。さらに、お喋りをやめるよう促すドイツ軍人に対しても、「あなたは何に従う？命令の奴隷になるな。良心の声

を聞きなさい」とたたみかけたが、さて現実は・・・？

## ■□■ 占領下での人間模様は？ドイツ側その1 ■□■

ナチス・ドイツの将校が白昼暗殺されたとの知らせが、パリのドイツ軍司令部に届くや、駐仏ドイツ大使のアベッツは司令部に赴き、「総統は正午までに報復案を求めておられる。総統の望みはフランス人150人の処刑だ」と告げたが、前述したシュテルプナーゲル將軍とエルンスト・ユンガー大尉、そして駐仏ドイツ軍司令部参謀長シュパイデル大佐（ハラルド・シュロット）の3人は、何とかヒトラーの命令を阻止しようと試みた。しかし、彼らには、即刻50人、さらに1日ごとに50人ずつ、3階にわたっての執行に先延ばしするのが精一杯だった。

いつの時代でも、どこの場所でも、この3人のドイツ側軍人のように、それぞれの持ち場、持ち場で最善の努力をしようとする人間がいるものだ。しかし、現実とは彼らの努力によって、「報復のリスト」への記載が48人で済んだのかもしれないが、ドイツ側にいる軍人たちの人間模様も複雑だ。



● ARTE France -2011-LES CANARDS SAUVAGES -7ème Apache Films-PROVOBIS FILM

## ■□■ 占領下での人間模様は？ドイツ側その2 ■□■

まず、エルンスト・ユンガー大尉はナチス・ドイツの軍人でありながらいかにも作家らしい繊細な面をスクリーン上で見せてくれるのでそれに注目！ピアノの伴奏で美しい声を聴かせてくれる女友達・カミーユ（アリエル・ドンパール）との語らいの中で、「ヒトラーの暗殺計画」をほめかすような会話するのは不謹慎きわまりないが、そこで「あなたも暗殺を？」と聞かれた際のエルンストの答えは、「私は観察者でありたい。自分が行うのは軍服の名誉を汚さないことと周囲の不幸を忘れないことだ」というものだ。さらに、「ユダヤ人の家族が逮捕されるのを見た。子供の泣き声が耐え難かった」と言うエルンストに対してカミーユは、「その軍服で救えなかったの？」と言い放ったが、このやりとりはどう見てもエルンスト大尉に分が悪く、カミーユの言い分の方が正当だ。

しかし、本作を観ていると、このエルンスト大尉にしても、オットー將軍にしても、ナ

チス・ドイツ幹部の反ナチ色の濃さにビックリ！ナチス・ドイツの軍人でありながら、ヒトラーの命令に盲目的に従うことだけは何とか避けようと努力している人間的な面がよくうかがえる。ナチス・ドイツにおいて、「ヒトラー暗殺計画」が何度も計画されたこと、そしてそれが現実にも実行された（が未遂に終わった）ことは歴史上の事実で、そこは日本帝国陸軍とは全く違うところだ。

## ■□■占領下での人間模様は？ドイツ側その3■□■

さらに、本作のクライマックスに向けて、ドイツ側は新しく配属されてきたばかりの、メガネをかけたいかにも頼りなさそうな兵隊ハインリヒ・オットー（ヤコブ・マッチェンツ）が登場する。赴任早々、「ソ連との闘いでは頭を使うことを教えられた」と言う彼は、上官から「ここでは頭を使うことは一切禁止！」とどなられたが、さてその意味をわかっているの？そんな彼の最初の任務が人質たちの銃殺だが、何と彼はここで「私にはできません」と申し出たからビックリ。

『人間の条件』全6部作（59～61年）や、勝新太郎・田村高廣コンビの『兵隊やくざ』シリーズでは、日本陸軍の古参兵による二等兵いじめのシーンが1つの売りだった。『人間の条件』では第3部、第4部で田中邦衛がとことんいじめられ、結局自殺してしまう小原二等兵役を演じていたが、ハインリヒ・オットーのこんな行動を見ていると、ナチス・ドイツの方が人間性の面では日本陸軍よりだいぶまし・・・？

## ■□■収容された政治犯たちは？その1 若者たちは？■□■

戦前の日本では「アカ」と言えば、それだけで何の疑問もなく反国家的危険分子とみなされていたが、カール・マルクスの生まれたドイツでは共産党の活動はすごいものがあった。また、1848年に発表された「共産党宣言」が爆発的に広がったヨーロッパでは、共産黨員や共産党シンパが多く、フランスでもその勢いはすごいものだった。中国共産党による「一党独裁」を大原則とする中国（中華人民共和国）には、「中国共産党」の下部組織（若者組織）として、共産主義青年団（共青团）がある。それと同じように、ドイツでもフランスでも共産党（労働党、社会党など名前はいろいろだが）の下部組織（若者組織）が存在していた。

本作冒頭、若者たちがかけっこ競争をするシーンが登場するが、これはシャトーブリアンにあるショワゼル収容所における、ちょっとした息抜きとして実施されたもの。したがって、そこで優勝した17歳のギィ・モケ（レオ＝ポール・サルマン）の賞品も身体を洗う石鹸という粗末なものだった。それに続いて、ギィとその友人のクロード・ラレ（マルタン・ロワズィオン）が塀を隔てて収容されている17歳の女性オデット・ネリス（ヴィクトワール・デュボワ）と愛の交換（？）をするシーンが描かれるが、ギィが指摘するように、ラレには既に奥さんがいるそうだから、ラレは思想的に早熟なら、女性関係でもか

なり早熟だ。それはともかく、ショワゼル収容所の政治犯棟にはギィやラレのような若者も収監されていたわけだ。

それは、ギィはパリに生まれ、共産党員だった父の影響を受け、リセ（高等中学校）の生徒だったときにフランス共産主義青年同盟に入り、1940年10月に、占領を批判するビラをまいて反共産特別警察に逮捕されるというバリバリの革命の闘士だったためだ。また、ラレも1937年に共産主義学生同盟のメンバーとなり、1940年にはソルボンヌ大学の共産主義学生のリーダーの一人となり、1940年11月11日に凱旋門で行われた反ナチスのデモに参加して逮捕されたという、若いながらも革命の闘士だったためだ。

## ■□■収容された政治犯たちは？その2 ベテランたちは？■□■

『キリマンジャロの雪』（11年）では、フランスの港町として有名なマルセイユを舞台として、構造的不況の中、20名のリストラをくじ引きで決めなければならない労働組合委員長の苦悩の姿が描かれた（『シネマルーム29』10頁参照）が、これは、第2次世界大戦後、1960年代の「労使協調型」の労働組合の姿だ。

それに対して、第2次世界大戦前や大戦中の労働組合の闘いはあくまで階級闘争としてのそれだから、労働組合の職で大きなストライキを何度も指揮した経験を有するジャン＝ピエール・タンボー（マルク・バルベ）は、まさに組合運動のベテランで共産党の闘士だ。そして、彼はショワゼル収容所の政治犯棟に収容されている政治犯のリーダー格だが、その他本作に描かれる多くのベテラン革命闘士たちの、華々しい活躍ぶりにも注目！

## ■□■27名の収容者たちの死にザマは？■□■

本作終盤のクライマックスは、ショワゼル収容所でリストアップされた27人の人質たちが、9人ずつ3班に分かれて、銃殺されていくシークエンスとなる。そこでは、全員が目隠しを拒否。ベテラン政治犯たち一人一人がそれぞれ、人間としての尊厳をかけて銃弾の前に倒れていく最後の姿はそれだけで胸に迫ってくるし、見ごたえがある。タンボーは当然のように「インターナショナル」を歌い、「ドイツ共産党万歳！自由万歳！」と叫んで息絶えたが、その他のベテラン闘士たちの尊厳感あふれる死にザマに注目！

他方、なぜかリストアップされてしまったギィとラレの2人の若者も、誇りを失わず銃弾の前に息絶えた。しかし、釈放が決まり妻が迎えにきているにもかかわらず、引き離されてしまったラレはとりわけ気の毒だ。銃殺の前に10分間だけ面会が許されたのはせめてもの情けだったが、いくら政治犯とはいえ、ナチス将校が1人暗殺されたことの報復として、釈放日にあった17歳の収容犯・ラレまで銃殺されたことを、どう考えればいいのか？

## ■□■ギィの手紙をめぐる、大統領権限のあり方は？■□■

本作のプレスシートには、渡辺和行氏（奈良女子大学文学部教授）の「レジスタンスの

再神話化と脱神話化」と題する小難しい(?)「Background」がある。現在、産経新聞の加藤達也前ソウル支局長が書いたインターネット上のコラムが韓国の朴槿恵大統領の名誉を毀損したとして、ソウル中央地検に在宅起訴されたことによって、朴槿恵大統領が何かと「お騒がせ」的存在になっているが、2007年には大統領となったフランスのニコラ・サルコジが同じような「お騒がせ」的存在になったことがある。

彼は大統領当選後に、ギイが死の間際にしたための手紙を愛国心の発露と評価して、命日の10月22日に全国の高校生に朗読させることを決定した。しかし、ギイが共産党の活動家であったことを伏せて手紙のみを朗読させるサルコジ大統領の手法に対して、記憶の政治的利用だという批判が巻き起こった。1967年にパリ17区にある地下鉄の駅名がギイ・モケ駅となったように、過去には共産党がギイを殉職者として神話化してきたが、今度は共産党の政敵が、歴史的な文脈を無視してギイの再神話化のために利用しようとしたとして問題にされたわけだ。

日本人はよほどフランスに詳しくなければ、そんな事情は知らないが、私がここで言いたいことは、銃殺される直前に17歳の少年ギイが書いた手紙が、今なお多くのフランス人の心に残っているということだ。スクリーン上で見るかぎり、ギイはかっこも好き、ボクシングも好き、そしてキレイな女の子も大好きという普通の少年だが、高等教育を受けていない。それにもかかわらず、詩を書くなど文章の才があったらしい。さらに書くだけでなく、彼がさまざまな詩についても詳しいことはオデットに対するさまざまな愛の告白(?)を聞いていても明らかだ。

## ■□■「書くことの大切さ」を本作で再認識！■□■

ギイと同じように、私も書くことが大好きだ。それは、書くことによって自分の考え方をまとめることができるうえ、自分以外の多くの人々に対して自分の考え方を伝え、残すことができるからだ。私の映画評論がギイが書いた「別れの手紙」のように何十年も後に語り継がれるとは思っていないが、ギイの手紙を含め、銃殺刑で倒れた27名の人質全員がそれぞれ書き残した手紙には大きな意味がある。

他方、私は靖国神社の遊就館を2度見学したが、そこに入ると、あの時代に特攻機に乗って戦場へ旅立った若者たちが、それぞれに父母そして兄弟たちを思い、手紙(遺書)を残していったことがよくわかる。それを見ていると思わず涙があふれてしまうのは、人間として当然の心情だ。

本作のクライマックスはハリウッド映画のような派手さは全くなく、淡々と銃殺の儀式が描かれるだけだが、そこに「書く」という作業が入ることによって、人間の尊厳が大きくクローズアップされることになる。そんな悲しいクライマックスシーンを見ながら、是非「書くことの大切さ」を再認識してもらいたいものだ。

2014(平成26)年10月14日記